



先週末、いくつかの仕事があ

って沖縄に行きました。講演会を企画して頂いたジユンク堂書店那覇店の店長さんの案内で、夜は栄町市場という郷愁誘うデーパーな飲み屋街へ。そのスナックで、この人の話題になりました。

インディペンデント雑誌『噂の真相』の名物編集長、岡留安則さん。若い人は知らないかもしれませんが、一時期は相当売れていた雑誌です。岡留さんは1月31日、那覇市内の病院で死去。71歳でした。死因は、右上葉の肺がんとの発表です。

2004年に『噂の真相』を休刊させてから、岡留さんは沖縄に移住。基地問題をはじめ沖縄の抱える多くの「矛盾」を取材し、執筆活動をしていました。16年に脳梗塞を患い、その

94 「噂の真相」 岡留安則

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療か在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

リハビリに励んでいたところ、昨年末に肺がんが見つかったとのこと。

えっ？ 昨年末にがんが見つかり1月に死ぬってどういうこと!? と驚く人もいるでしょう。そんなに進行するまでがんに気が付かないことがあるのか、と。しかし、そういう人はいくらでもあります。

私は先週だけでも、そんな人



を3人ほど自宅で看取りました。体に異変を感じて病院を受診し、末期がんと診断されてから1カ月以内の旅立ちでした。3人の病名は、膀胱(すいぞう)がん、肝臓がん、血液がんでした。3人も生活の質と治療を天秤(てんびん)にかけてよくよく考えたうえで「治療せずに在宅」の方を選択されたのです。

岡留さんがなった肺がんも、早期ではほぼ無症状です。咳や痰が増えるくらいで気が付いた時には末期、ということとは珍しくありません。

ピンピンコロリで死にたいと望む人が多いですが、それは要

するに突然死です。突然の死を受け止められない家族や周囲の人はPTSDに陥ることもあります。

末期がんという病状が判明して1カ月あまりで旅立

つ人の場合は、準ピンピンコロリと言えなくもありません。しかし、厳しい病状を受け入れ、心づもりをする時間がわずかなのもあるのと無いのでは、突然死とは大きく違はずです。

もしも、私がそんな状況になったときは、人知れず沖縄に部屋を借り、毎晩スナックめぐりをしながら死にたいなあ…と夢想します。だから、沖縄で旅立った岡留さんを少し羨(うらや)ましく感じます。

岡留さんは、葬儀が終わるまで自分の死は公表しないでほしいと言っていたとか。『噂の真相』を作った人が、自らの死は噂してほしくなかった、ということでしょう。

沖縄の海に散骨してほしいと言いつつ、死の直前はあの名曲、『花』を聴いて涙していました。ただ願わくば、県民投票までは、お元気でいてほしい。ご本人も、それだけは心残りだったのでは。

「花」を聴いて涙した最期